

D. H. ロレンスのノートブック

倉 持 三 郎

松 山 大 学
言語文化研究 第32巻第1-2号 (抜刷)
2012年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 32 No. 1-2 September 2012

D. H. ロレンスのノートブック

倉 持 三 郎

1. は じ め に

本論は D. H. ロレンスが 1906 年 9 月から 1908 年 6 月にかけてノッティンガム大学 (University College, Nottingham) に在学していたとき使用した 2 冊のノートブックを紹介し、検討・考察することを目的とする。ノートブックには Note Book と Essays の 2 冊がある (両方とも罫がある)。前者は後で述べるようにラテン語、フランス語学習に使用した後、詩が書かれた。卒業後も余白に詩が書かれ 1910 年まで使われた。後者は講義を書くためと課題やエッセイを書いて提出するためだけに使われた。ロレンスの死後、ロレンス家がノッティンガム大学に寄贈し現在は大学が所蔵している。両方ともきれいな筆記体で書かれ、ロレンスの自署がある。John Worthen の『ロレンス伝』(*D. H. Lawrence: the Early Years*, 1991) では、それぞれ、LaL₂、LaL₁ とよばれているものである (p. 539 参照)。その伝記には、すでに読者は皆このノートについて知っているように書いているが、一般の読者にはわからない。ロレンスが書いているのはこういう内容なのだ、ということを説明する必要がある。

Note Book はロレンスが詩を書くのに使ったということはよく知られている。ロレンス自身 *The Collected Poems* (1929) の序文で述べているが、はじめて詩を書いたのは 19 歳の 1905 年であり、それは“*Campions*”と“*Guelder Roses*”であるという。序文でこの Note Book は“*a little college notebook*”として言及されている。Vivian de Sola Pinto ら編の *The Complete Poems* (1964) で、このノートの詩が公刊された。ノートにある詩作のうちの多くは *Juvenilia* (習作)

として載せられてある。ロレンスとしては未定稿を發表されたことに不満であろうが研究の立場から言えばマイナスとは言えない。ケンブリッジ版の全詩集が近く刊行されると聞く。そこでも活用されるであろう。1966年、筆者は Nottingham University を訪れたとき、このノートブックに関心を持ち、借り出して読んでいたところ、じっくり読みなさいという好意からであろうか、思いもよらず図書館員が私にこの2冊と大学が所蔵しているロレンスの全書簡の3点のマイクロフィルムを作ってくれた。私は大事な資料なので写真版のようなものが出版されるだろうと心待ちにしていた。ところがそれより半世紀以上も経ってしまったのに、寡聞にしてノートブック全体の写真版が出たことを知らない。すこしでも紹介した方がよいだらうと思ひ、所有のマイクロフィルムを材料にしてその概略を述べる。

2. 整 理 番 号

Pinto の *The Complete Poems* が出来てから7年後に *D. H. Lawrence Review* Vol. 4, No. 3 (1971 fall) に Egon Tiedge の論文 “D. H. Lawrence’s Early Poetry: The Composition-Dates of the Drafts in MS E 317” が發表された。この論文はここで扱う Note Book を材料として初期の詩の制作時期を決定する試みである。まず、Note Book の資料としての呼び方であるが、Worthen の伝記には LaL₂ が使われている。ただし、Tiedge によればこのノートの整理番号が変わった。はじめは、詩の原稿は Warren Roberts の *Bibliography* でそうであるように所有者は違っても自筆原稿は E という共通番号でよばれている (Roberts は E 317 として Note Book に書かれた詩の題名をあげている)。Tiedge の論文のタイトルはこれを指している。ノッティンガム大学図書館は、整理番号として Note Book に MS 1479 の番号をつけた (私の所蔵のマイクロフィルムも Nottingham University MS 1479 とある)。これが LaL₂ と Worthen が『ロレンス伝』のなかでよぶものである。私の所有のマイクロフィルムの2頁目の上欄に LaL₂ (2

は小さくない) の文字が手書きで記入されているので、1966年の時点では並行して使用されていたようである。

Essaysの方は、私の所有のマイクロフィルムにLaL1 D. H. Lawrence English Exercise Bookと整理番号が書かれてある(LaL1の1は小さくない)。

3. Note Bookの内容

次にNote Bookの内容を頁を追って述べたい。頁数は1, 2...であらわす。左頁から始まっている。自署のある頁を1頁とする。Robertsは内容の頁分けはしていない。

- 1 ロレンスの自署。Latin Notesとロレンスの筆跡で書かれてある。The Nottingham University MS 1479という整理番号がある。
- 2~10 ラテン語の単語調べ。2の上欄にLaL2という文字が書かれている。
- 11~14 フランス語。
- 15 詩“Honeymoon”。ノートを逆さに使って頁の下から上に書いている。
- 16 フランス語。
- 17 詩“Sorrow”と“Grief”。
- 18 上半分はフランス語で下半分は詩。
- 19~20 フランス語。
- 21 詩“Brooding”と“Loss”。
- 22 詩“Bereavement”。
- 23~32 フランス語。
- 33 詩“Dream”。15と同じくノートを逆さに使って下から上に書いている。“Dream-confused”の原型。詩の関連はRobertsが詳しい。
- 34 上半分はフランス語、下半分は詩。
- 35 上の5分の4は詩“The Crow”。下の5分の1は“Far off the lily-statues...”ではじまる詩(“At the Front”の原型)。

- 36 ラテン語。ホラチウス (Horace) の英訳。Carmen I (Carminvm, Liber I, 1。Loeb Classical Library では *Ode I, i* に当たる)。
- 37 上の3分の1はホラチウスの英訳の続き。下の3分の2は詩 “In another country” (“The North Country” の原型)。
- 38 Homer の詩の2種の詩形など。
- 39 詩 “Honeymoon”。
- 40 ホラチウス Carmen III。
- 41 Carmen III の続きと Carmen IV。
- 42 Carmen IV の続きと Carmen V, Carmen VI。
- 43 Carmen VI の続き。
- 44 Carmen VII。
- 45 詩 “Honeymoon” の “But surely my soul’s dream...” 以下。
- 46 フランス語4行。下の4分の3は “Sorrow”。
- 47 詩 “Last Words to Muriel”。Worthen の『ロレンス伝』にこの頁の写真版がある。
- 48 詩 “Campions”。上と同じく『ロレンス伝』に写真版がある。上欄に1という文字が見える。詩のうちの最初という意味である。
- 49 詩 “Campions” の続きと “Guelder Roses”。2の番号。
- 50 詩 “Guelder Roses” の続き。
- 51 詩 “From a College Window”。3の番号。
- 52 詩 “Study”。4の番号。
- 53 詩 “Study” の続き。
- 54 詩 “The last hours of a holiday”。 (“Last Hours” の原型) 5の番号。
- 56 詩 “The Fall of Day”。6の番号。
- 57 詩 “Evening of a Week-day”。7の番号。
- 58 詩 “Eastwood Evening”。8の番号。
- 59~60 詩 “The Piano”。9の番号。

- 61～62 詩 “Lightning”。10 の番号。
63～65 詩 “Married in June”。11 の番号。12, 13 なし。
66 詩 “The Worm Turns”。14 の番号。
67～68 詩 “On the Road”。15 の番号。
69～72 詩 “The Death of the Baron”。16 の番号。
73 詩 “Song”。17 の番号。
74～75 詩 “Love comes late”。18 の番号。
76 詩 “A Tarantella”。
78～79 詩 “Song”。20 の番号。21 なし。
80 詩 “Cherry Robbers”。22 の番号。
81～82 詩 “In a Boat”。23 の番号。
83～84 詩 “Dim Recollections”。24 の番号。
85～86 詩 “Renaissance”。
87 詩 “A Failure”。
88 詩 “A Winter’s Tale”。
89 詩 “A Decision”。
90～91 詩 “Dog-tired”。
92 詩 “A Train at Night”。
93～94 詩 “Violets for the Dead”。
95 詩 “Baby Songs / Ten Months Old”。
96 詩 “Trailing Clouds”。
97 詩 “Triolet”。
98～99 詩 “Coming home from school / Rondeau Redoublé”。
100～101 詩 “Eve”。
102 詩 “After School”。
103～104 詩 “School”。
104～106 詩 “A Snowy day at school”。

- 107~108 詩 “Letters from the town / The Almond Tree”。
- 109~110 詩 “Letters from Town / The City”。
- 111~112 詩 “Discipline”。
- 113~116 詩 “A Still Afternoon in school”。
- 117~121 詩 “A Still Afternoon in School / Dreams Old and Nascent”。
- 122~123 詩 “Reading in the Evening”。
- 123 詩 “Movements 1. A Baby running Barefoot”。
- 124~125 詩 “A Baby Asleep after Pain” と “3. The Body Awake”。
- 126~127 詩 “4. A Man at Play on the River”。
- 128~130 詩 “The Review of the Scots Guards”。
- 130~133 詩 “Restlessness”。
- 134~135 詩 “A Bell”。
- 136~137 詩 “Lost”。
- 138~141 詩 “After the Theatre”。
- 141~142 詩 “Brotherhood”。
- 143~144 詩 “The End of another home-holiday”。
- 145~146 詩 “Brotherhood”。
- 146~150 詩 “End of another home-holiday”。
- 150 詩 “The Songless / 1. Today Tonight”。
- 151~152 詩 “2. Tomorrow”。
- 153~154 詩 “Song-day in autumn (When on the autumn roses...)”。
- 154~156 詩 “Amour”。
- 156~158 詩 “Weeknight service”。
- 159 詩 “Fooled” と “Dream”。

4. Note Book の内容の配列順序

Note Book は 1906 年 9 月に大学に入学して購入して使いはじめたのだから記載されている内容は前から頁を追って書いてあると考えられるが、しかし、かならずしもそう書かれていない (Essays は 1907 年 2 月から頁を追って書いてある)。たしかにラテン語、フランス語はその順序に書いている。しかし詩の場合、Note Book に載っている順序で書かれたわけではない。もしそうならば、このノートが詩の制作時期を決定する証拠になるが、そうはならない。また、このノートは大学在学中だけに使われたわけではない。大学を卒業してロンドン郊外のクロイドンの小学校で教えはじめてからも詩を書くのに使われ、1906 年から 1910 年まで使用された。次に順序について Tiedge に従って問題点の主なものをあげておく。

- (1) 48～49 頁に詩 “Campions” と “Guelder Roses” が書かれてあるが、ノートに記載されている時期に制作されたものではない。*The Collected Poems* (1929) の序文でロレンスが書いているように実際は 19 歳の 1905 年の春に別のノートに書かれた。それをこの Note Book に清書して 1, 2…の番号を振った。46 頁でラテン語とフランス語は完全に終わったので、これ以上は Note Book は授業に使わないとロレンスは判断して 1 頁だけ白紙にして “Campions” を書き、そのあとはすべて詩を書いた。
- (2) 授業が終わる 46 頁までの所にも詩が書かれている。これは Tiedge によると 1910 年頃の詩である。“Sorrow” と “Grief” という詩が 17 頁に書かれてある。この頁の前後は通し番号のあるフランス語の課題が続く。16 頁と 18 頁のあいだに 1 頁 (左頁) の余白を残したことになる。何か課題について訂正か加筆かするために白紙の 1 頁を残したのだろう。それより 4 年後に Note Book に余白があるのを知って、そこに詩を書いた。その当時はロレンスはロンドン郊外の小学校で教えていたので、故郷の Eastwood に帰ってきたときも、そのノートを鞆に入れて携えていたことになる。21 頁と 22 頁には

“Brooding”, “Loss”, “Bereavement” という3編の詩が書かれてある。これは1910年12月の母の死についての内容だから、その頃書いたものである。フランス語が続いているのに、この見開き2頁がなぜ白紙のままであったのか。たまたま、その頁がくっついていたのか。謎である。結果的には、そこが空いていたので4年後に詩を書いたことになる。

47頁の“Last Words to Muriel”はTiedgeはロレンスがJessie Chambersと決定的に別れることになる1910年に書いたとしている。フランス語の授業と“Campions”の間に1頁の余白があり、それを3年後に埋めたということになる。以上のようにNote Bookは前から順序を追って書いて行ったものではない。

5. ラテン語学習

ロレンスは大学ではじめてラテン語を学習した。ラテン語は中等学校で学ぶものであった。現在中等学校にgrammar schoolとよばれているものが多いが、このgrammarはLatin grammarを意味するものであったことを考えれば、いかにラテン語が重要であったかがわかる。20世紀の前半でも4分の1の中等学校でラテン語が教えられていたという。ロレンスより4年下で後に友人になるJohn Middleton Murryは自伝*Between Two Worlds* (1936)のなかでpublic schoolのChrist's Hospitalでラテン語だけではなくてギリシャ語をいかに熱心に学習したかを書いている。ロレンスが1898年から1901年まで学んだNottingham High Schoolではラテン語はどう扱われていたか。Worthenの『ロレンス伝』によれば、当時の校長がUniversityへの進学を目標にしていたという。すると3年までにはラテン語のクラスはあつたはずだと想定される。しかしロレンスは学習していない。ラテン語未習のため大学の学位(degree)を取得できる3年のコースに進めなかった。2年間で教員免許状を取得しただけで卒業した。しかし未習者として1年目に次のようなラテン語の学習はした。

未習者として、はじめ「ラテン語初歩」ともいうべき文法を学んだようである。そのあとでホラチウスのオードを読んだ。劇の *A Collier's Friday Night* の Act II に次のようにラテン語についての言及がある。

MOTHER: I'm sure! And in the middle of the term too. What's it for this time?

ERNEST LAMBERT: Piers the Ploughman, that piffles, and two books of Quintus Horatius Flaccius, dear old chap.

息子が教科書を買うために金をくれと母に頼むところであるが、term（9月から12月か）の初めに「ラテン語初歩」を終えて、続いてホラチウスを読むためにその詩集を買うためである。ホラチウスの2冊というのは何を指すかは不明であるが、卒業後のロレンスの引用から判断するとオードの第1巻と第3巻のようである。金をくれと頼んだあと Ernest はラテン語への instinct があると教授に褒められたと母にいう。

Note Book には最初、ラテン語の単語の意味や、文法について書いている。Note book の2頁目は次のように書かれている。

fio = become take place

nanciscor, nactus = light upon

confertus = pack

arma = shield

frequens = crowded

pervinco = prevail upon

vox often used for "word" "phrase"

'vox voluptatis' = 'the word pleasure'

-pleasure in Genitive

abl. of gerund equivalent to pres. part.

Si--- posset = to see if

Summa rerum = the whole issue

parva momenta = unimportant issues

ferox = high spirited

(premes) – premento = by depreciating

(以下約9頁分省略)

初歩の文法が終わったあとホラチウスのオードを読み始めた。現在、ギリシャ・ローマ古典の英語との対訳の定訳版ともいえる Loeb Classical Library は刊行の最初は1912年であり、ロレンスが訳している時にはなかった。次はロレンスによるホラチウスの英訳である。筆跡が判読できない部分は(?)で示し、欠落したと思われる単語は[?]で示す。句読点は原則としてロレンスに従う。

36頁から37頁 記載はないが Carmen I (Ode I)。

Maecenas sprung from king's ancestors, thou my protector and sweet glory. Some there are who enjoy to gather dust in the Olympic games & wheels grazing the turning post & palms of victory lift them up to the gods, the Lords of the earth. If the mob of the fickle People of Rome strive to lift him up with triple ranks one rejoices. Another if his own stores contain whatsoever is swept from the threshing floor of Libya. Thou mayst never move away by gift of unexpected wealth the man who rejoices to cleave the fields of his father with the hoe, that he may plough the sea with a vessel, a frightened sailor from Cyprus to the Myrtoan Sea. The merchant fearing the wrestling with the waves of the Icarian and (?) the African wind praises the leisure and retirement of his little town. Soon he refits the stricken ship untaught to bear poverty.

There is one who spurns neither the cups of old Massician not to take (or steal) away a part from the full day. Now with limbs stretched on under the green arbutus, now by the source of the soft rising sacred water. Camp life pleases many and the sound of the tuba mixed with the trumpet and wars execrated by mothers. The hunter remains under the open cool sky, unmindful of his tender spouse, or if the hind is seen by the faithful whelps or if the wild boar bursts the well-made meshes. But wreaths of ivy that adorn the forehead of seers raise me to the company of the gods above.

Carmen の第 1 巻から第 3 巻は紀元前 23 年に刊行された。訳出された第 1 巻第 1 歌はマイケナスへの献呈の詩である。マイケナスはアウグストゥス皇帝の友人であり、ローマの政治家で文芸の保護者であった。この詩の趣意はオリンピックの競技に励んでいる者がいたり、畑の耕作に従事している者、航海する者がいるが、自分は詩作に専念しているのだから、マイケナスに一流の詩人として認められたいということである。最後の部分は訳されていない。ロレンスは *The English Review* に掲載された自分の詩“Snapdragon”を 1912 年の *Georgian Poetry* に採録してくれ印税までくれた編集者の Edward Marsh をマイケナスにたとえて感謝している。次に不順な天候の好転を神に祈願する Carmen II がくるはずだが、Note Book にはその訳がない。

Carmen III 40 頁から 41 頁

So may thou goddess ruling Cyprus, so may the brood of Helena, bright star, so may the father of the winds rule thee. O Ship, all other winds being bound except Japyx (NW wind). O Ship who owe Virgil who was trusted to thee, may you return unharmed to the Attic confines & I pray may you preserve him who is half my soul. To thee (ship) belonged strength and a triple armour on bows, who first gave the fragile ship to the cruel storm neither

did he fear rough S. wind, storming against the N. wind nor the baleful Hades nor the rage of the S. Wind than whom none wields a stronger sway on Hadria whether he wishes to raise or still the waters. Which of the advent of Death did he fear, he who sees with dry eyes floating monsters, the sea troubled & the infamous rock Acroc. God at his providence (discretion ?) in vain has cut off countries by the estranging main, if the impious ships do overleap the shallows which are not to be touched. The human race, bold to endure everything, thro (?) the forbidden iniquity. The bold race of Jupiter carried by evil distinctions fire to the nation. After they had stolen the fire from its home in the ether, leanness & unfamiliar cohorts of fever brood over earth & a slow fate hastens the step of death before far off. Daedalus tried the hollow air on wings not given to man. Hercules' labour breaks thro hell. Nothing is hard to mortals ; by folly we ascent the heaven itself & we do not suffer (thro our own crimes) Jove to send the thunderbolts of wrath.

内容はホラチウスの旧友、ヴェルギリウス (Virgil) のギリシャへの船旅が無事であるように祈るものである。ヴェルギリウスは当時すでに有名な詩人であり、彼をマイケナスに引き合わせてくれた恩人でもあった。

4 (Carmen IV とは書かれていない) 41 頁から 42 頁

The bitter winter is giving way before the pleasant change of Spring & W. Wind & the rollers rolling the dry ships to the [beach?]. And now the flocks no longer rejoice in the stables nor the ploughman at (?) his fire & the meadows no longer grow white with the white hoar (?) ; and Cytherean Venus leads her Choirs while the moon is shining & the comely Graces joined to the nymphs shade the earth with their feet while Vulcan makes glow the heavy workshops of the Cyclop.

春が来た。万物はよみがえった。しかし死がくることを忘れてはならない、という内容。友人の Sestius に呼びかけた詩。Sestius と Horace はともにフィリパイで Brutus 軍と戦った。後半の訳がない。

Carmen V To Phyrria (?) 42 頁

Whoever urges thee (?), a slender boy steeped in sweet smelling liquids on a bed of roses under the welcome cave. For whom do you bind that yellow hair, you who are simple in your elegance. Alas, how often will he lament changing faith & changing fortune (gods), and being unaccustomed to it all, will he marvel at the rough sea roused by black winds, he who, buisting (?) in gold, enjoys thee, hopes always to be fancy free, always beloved, being (yet) ignorant of the deceitful wind. Woe unto those whom you—yet untried—dazzle. The sacred walls show by a table that I have hung my dripping garments to the ruling god of the Sea.

ピュルラーという女性にあてた詩である。Loeb Classical Library の訳者は To a Flirt というタイトルにしている。ピュルラーは浮気女である。海上で突然強風が吹いてきて船が難破してしまうように、彼女を愛した若者たちが捨てられて辛い思いをした。海上での突風というのは、現代でいささかそぐわないが、この作品はギリシャ文学の伝統を受け継ぐものである。ギリシャの愛の女神は海の女神でもあった。ギリシャの詩人たちはアフロディティの2つの面をうまく利用したが、この詩もその伝統を受け継ぎ、予想外の海上の強風というのは、この女神が持っている属性であり、ホラチウスもそれにのっとって書いている。ジョン・ミルトンがはじめてこの作品を英語に翻訳し、これがイギリスにおける Ode 流行のきっかけをつくっている。次の48頁でロレンスが書くことになる Campions が表す情熱の女性と通じるところがある。

Carmen VI 42頁から43頁

You shall be recorded by Varius the bird (swan?) of Maenonian song as brave and victorious. The soldier has carried through anything either on board ship or on horseback while you have led him. We, Agrippa, do not try to tell these things neither to relate the heavy choler of the ignorant Pellidis, nor of the course of the shifty Ulysses through the sea, nor the savage home of the Greek hero, we slender poets are not for such great things while strong modesty and my mare (?) mistress of unwarlike lyre forbid me to whittle down the praises of the peerless Caesar & yours by want of wit. Who could write worthily of Mars covered by an adamantine tunic or the black Meriones in the Trojan dust? or Tydides the equal of the gods, through (?) the help of Pallas. We hear whole sing of banquets and battles of fierce maidens with the young men but with nails pared. Or if we are inflamed with love, we will sing light, as is our wont.

内容は将軍 M. Vipsanius Agrippa から自分についての頌歌を書くように依頼されたが、丁重に断る詩。自分は酒盛りの歌とか恋の歌ならよいが、叙事詩は向かない。かわりにホメロス風の詩が得意の Varius を推薦する。

Carmen VII 44頁

To Plancus

Others will praise Rhodes or Mytilene or Ephesus or the walls of Corinth between two seas or Thebes remarkable for Bacchus, or Delphos for Apollo or the glisten (?) of Tempe in Thessaly. Some there are to whose (?) one work it is to celebrate the town of the virgin Pallas with perpetual song and to set conspicuously on their brows the olive gathered from all sides. Many a man speaks of Argo with its horses and rich Mycena in fitting honor of Juno.

As the clear SW. wind soft sweeps away the clouds from the black heaven,
nor is it in travail with perpetual showers. So you wisely work to finish...

内容は大政治家 L. Munatius Plancus に寄せる詩。多くの人はアジアやギリシャの町が好きだという。私は Tibur の町が好きだ。なぜならあなたの生まれ故郷だからだ。後半部はない。

6. 上記以外でのホラチウスに言及している箇所

ホラチウスのオードは4巻ある。Note Book にロレンスが英訳したのは第1巻だけであるが、書簡と作品の言及から判断するとロレンスは教室で第1巻のほかに第3巻を学習したのではないかと思われる。非常によく暗記していて、おそらく原典を見ないで書簡や作品で引用できたらう。かなり一生懸命にホラチウスを勉強したと思われる。以下で英訳以外でロレンスが言及している箇所をあげる。

第1巻

第11歌と第23歌 “Liar! –Well, you called me! Besides, I don’t care! ‘Carpe diem’, my rosebud, my fawn. There’s a nice Carmen about a fawn ‘Time to leave its mother, and venture into a warm embrace’ Poor old Horace –I’ve forgotten him.” *The White Peacock*, p. 85 and *The Trespasser*, p. 100.

第14歌 I must hide the stuff –That is a young man’s motto –it means ‘lest thou owe the winds a laughing stock’ –I ought to substitute ‘filiis’ or ‘virginibus’ for ‘ventis, but it wouldn’t scan. I remember I warn my hero with those words ‘Nisi ventis debes ludibrium’. 1908年6月15日付け Blanche Jennings 宛て書簡。

第22歌 I never have anything private (No impudence here). Integer vitae scelerisque purus / Non eget... 1913年7月13日付け Constance Garnett 宛て書簡。

第3巻

第1歌 Small private editions are really much more to my taste. ‘Odio (*sic*) profanum vulgum (*sic*) though it’s not the vulgus, it’s literatus literatibus.’ 1926年2月1日付け Harold Mason 宛て書簡。

第2歌 (1) ‘est et fideli tuta silentio / Merces’ which is ‘There is a safe reward awaits faithful silence.’ 1908年4月21日 Louie Burrows への書簡。

(2) ‘Raro antecedentem scelestum / Deseruit pede poena claudo’ ‘Rarely does lame foot retribution / Relinquish the trail of the offender.’ 1911年1月30日付け Louie Burrows への書簡。

第8歌 I’m taking Horace’s advice ‘Dona praesentis cape laetus horae et (*sic*) / Linque severa’ which is quite trite, merely: ‘Take with a glad heart what the day gives, and stop bothering.’ 1908年4月21日付け Louis Burrows 宛て書簡にある。

第29歌 “Can’t you smell ‘fumus et opes strepitumque Romae’?” *The Trespasser*, p. 145.

7. フランス語学習

ラテン語とは違い、ロレンスはフランス語を Nottingham High School で学習していた。フランス語は High School に行かなければ習得できないので、一種の特殊技能といえる。実際、就職には有利である。*Sons and Lovers* には High School (作品では the board school 卒業でフランス語は個人教授で習得したとある) 卒業後 Paul Morel は義足などを扱っている会社への就職の面接を受ける。社長にフランス語の商品注文の文を訳させられる。doights という単語

を *fingers* と訳すると、*stockings* に *fingers* があるのかと笑われる。Paul は *fingers* という意味があると抗弁するが、Paul の負けである。しかし「折り返し足指のないグレイの靴下を二足送ってほしい」というフランス語を初見で訳せるだけのフランス語の力はあった。Worthen の『ロレンス伝』によれば最初の学期ではフランス語は 17 人のクラスで 1 番であった。

Note Book に課題の番号が記載されていることから判断するとフランス語の教科書があったと考えられる。それを基に学習した。そしてその方針は英語の原典をフランス語に訳させるというのが中心のようである。Note Book にフランス語訳されている英語の原典と比べてみると一部の抜粋であり、それも、かならずしもつながっていない。

68 (番号) 12 頁。

Quand le vieux secrétaire était malade ou absent, on m'appelait parfois pour faire la correspondance anglaise. Je n'étais jamais en retard mais je me présentais à l'heure fixée et on me faisait entrer comme (*sic*) l'horloge sonnait l'heure dite. Le roi, encore au lit, ouvrait lui-même ses lettres: ensuite, comme sa mauvaise vue l'empêchait de les lire, il les remettait à son secrétaire. Je me rappelle que la première lettre que je vis venait du feu de R. Je la pris de la main du roi. Je commençais 'Sire'—mais je n'allai plus loin. 'Eh bien' dit le roi 'Continuez.' 'Je ne puis, monsieur.' 'Pourquoi pas.' 'Je ne peux pas déchiffrer.' 'C'est très facile.' 'Oui, monsieur, peut-être bien, quand on le sait; mais (je n'y vois que du feu) je n'y comprends rien de tout. Le duc de R. n'écrivit rien clairement, mais il avait en outre une manière particulière de terminer ses 'i' et de mettre les points dessus sans retirer la plume du papier.' Que le lecteur en fasse l'essai avec les mots que j'avais à lire ce jour-là et il verra la difficulté. 'Sire les nouvelles qu'il plaît à Votre Majesté de donner sont indéfinie sous le rapport—' D'abord les mots ressemblaient à des

hiéroglyphes extraordinaires. Le roi ne s'impatientait pas et ne se fâchait pas avec (*sic*) moi comme je savais qu'il le faisait avec son secrétaire (allemand). Cependant, en un instant je compris la manière particulière de mettre les points sur les 'i' et alors tout allait comme sur des roulettes.

Souvenir de la cour et de l'époque du Roi E. de Honovre Le Révérend—

ロレンスの Note Book には原典の著者名はないが著者は Charles Allix Wilkinson で Ernest of Hanover 王の宮廷に出入りしていたが、その回想録 *Reminiscences of the court and times of King Ernest of Hanover* (1889) を書いた。上記はその第 12 章で、いつものドイツ人の秘書がいなかったので代わりに著者が国王のために英文の手紙を読むが、i の点がふつうと違う筆跡なので英語ながら著者が読めないで苦しむところ。R. = Rutland.

69 (番号) 20 頁。

Le Mangeur d'Opium à l'Opéra Italien

Feu le duc de N. avait coutume de dire 'Lundi prochain, si le temps le permet, je me propose d'être ivre.' Et de la même manière, je fixais d'avance combien de fois en un temps donné' je commettais une débauche d'Opium. Cela arrivait rarement plus d'une fois en trois semaines, et le moment choisi était toujours le mardi ou le samedi soir. Ma raison pour cela était que le mardi et samedi étaient pendant plusieurs années les jours réguliers de représentation au théâtre du Roi. Pour cinq schellings on pouvait avoir une place au 'paradis' et ce paradis était sujet à moins d'ennui que le parterre de la plupart des théâtres. Outre la musique de la scène et de l'orchestre j'avais tout autour de moi pendant les entractes de la représentation la musique de la langue italienne parlée par les (*sic*) car le paradis était ordinairement rempli d'Italiens et j'écoutais (*sic*) avec un plaisir semblable à celui avec lequel W. le voyageur,

couché par terre, écoutait le doux rire des Indiennes, car, moins on comprend une langue, plus on est sensible à la douceur ou à la dureté de ses sons. C'était donc pour moi un avantage à cet égard qu' (*sic*) à cette époque je n'étais pas très fort en Italien (*sic*). Je ne le lisais que peu, je ne le parlais pas du tout, et je ne comprenais pas la dixième partie de ce que j'entendais.

Confessions d'un Mangeur d'Opium Anglais De Quincey

Thomas de Quincey : *Confessions of an English Opium-eater* (1822) の章のひとつ “The Pleasure of Opium” から。著者がロンドンでイタリア・オペラに行くが幕間に意味は不明だが周囲で話す観客のイタリア語の美しさに聞き惚れる話。N. =Norfolk W. =Weld

43 (番号) 24 と 26 頁

Lord Evandale ne put plus contenir son impatience. Il chargea à la tête de quelques soldats qu'on avait tenus à réserve dans la cour du château et bien qu'il eût le bras en écharpe, il les encouragea de la voix et du geste à aider leurs camarades qui étaient aux prises avec B. Alors le combat prit une tournure acharnée. Le chemin étroit était encombré des partisans de B. qui se pressaient en avant pour soutenir leurs camarades. Les soldats animés par la voix et la présence de Lord E, battaient avec fureur. Leur petit nombre était en quelque mesure compensé par leur adresse supérieure et par l'avantage du terrain. Ceux qui étaient dans le château essayaient d'aider leurs camarades chaque fois qu'ils pouvaient diriger leurs mousquets de façon à tirer sur l'ennemi sans danger pour leurs amis. Le château était enveloppé de fumée et les roches résonnaient des cris des combattants.

Walter Scott : *Old Mortality* の Vol. 2, Chapter 4 から。チャールズ2世派の

Lord Evandale は城を包囲する反乱軍と戦う。城中には自分の求婚を拒んだ女性がおり攻囲軍の指揮官のひとりはその女性が愛する男性である。B. = Burley. 攻囲軍の総指揮官。

8. Essays (LaL, D. H. Lawrence English Exercise Book) の内容

頁数 1, 2 … であらわす。

- 1 ロレンスの自署
- 2 ~ 5 *Macbeth* 1907年2月22日の日付。
- 6 ~ 9 “Character Sketch of Lady Macbeth”
- 10 ~ 12 Extracts from *Macbeth*
- 13 Correction of a faulty passage
- 14 ~ 18 “The Fairies of *Midsummer Night's Dream*”
- 19 ~ 22 “The Character of Theseus”
- 23 English Literature
- 30 Elizabethan Prose
- 32 Shakespeare
- 35 Shakespeare's Inner Life
- 44 Shakespeare's women
- 50 *Hamlet*
- 61 Shakespeare's *Sonnets*
- 67 Edmund Spenser
- 74 Bacon
- 81 the Mask
- 83 Langland & Chaucer

提出された次の3編のエッセイには評点がついてある。

“The Character Sketch of Lady Macbeth” 8+/10 (10点満点の8+点の意味。Worthen, p. 185 参照)

“The Fairies of *Midsummer Night's Dream*” 9-/10

“The Character of Theseus” 9/10

以上のエッセイをややくわしくみる。“The Character Sketch of Lady Macbeth”では、ロレンスは William Hazlitt のマクベス論を引用している。「憎むというよりも恐れる女性である」としている。そしてダンカン王がマクベスの居城に来たときの夫人の殺害の決意の部分引用している。Hazlitt の意見は夫人はそういう悪女であるということなのだが、ロレンスは違う意見を述べる。その論点はその悪行も夫故なのだ論じる。当時はイギリスにはまだ女性参政権がなく、教育を受ける機会もなく女性は自立できなかった。結婚して夫に頼っていくしかなかった。その様な女性の姿がマクベス夫人に反映されているとする。このエッセイには 1907 年 3 月 15 日という日付けが入っているが、1903 年の WSPU 結成以来、女性参政権獲得運動は激しさを増しつつあった。

How then came she to be the instigation of such crime? The position of woman in her days did not allow them personal ambition, did not provide them with food for thought nor outlet for their natural genius. Consequently a woman devoted herself entirely to the man whose choice she was. Lady Macbeth's ruling passion was her love for her husband, and on his behalf she expended her natural powers.

“The Character of Theseus”のなかでは、次のようにロレンスは Theseus は「紳士」の典型であると論じる。

As actual person Theseus is the embodiment of a noble gentleman whose sphere is action and whose thought is all rational.... Theseus has all the solid

virtues of a sound, wise man. He is so little subject to strong emotion that his judgment is always clear and unbiased. He represents the law, "Which by no means we may extenuate" and is rigid in execution. Yet there is no spirit of tyranny, no haste of condemnation. "Take time to pause" he wisely advises Hermia, and gives her till the "next new moon." In everything Theseus is beyond reproach, a perfect gentleman whose prowess commands submission and whose generosity wins love.

Hazlittはこの作品論のなかで Duke of Athens の Theseus が狩猟で獵犬たちを谷間で放すと、その吠え声がこだまして妙なる音楽をかなでると述べる箇所注目する。この箇所は Shakespeare の詩人としての卓越した感覚を表すものであるが、ロレンスは Theseus の別の点に着目する。寛大で道理のわかる「紳士」だというのである。家臣の娘 Hermia が父親の望む相手ではなくて、ほかの男と結婚したいというのを論じて、父の望む男と結婚するようにいう。もし父のいう通りにしないと Athens の法によって処罰するという。しかし、早急に処罰はしない。次の新月の日まで待とうという。この言動をロレンスは rational であると評価する。ロレンス自身は、これを書いた5年後に、夫のある女性と駆け落ちしたので、このように「紳士」を強調することはロレンスの行動と一致しないのではないかという見方もできるが、逆に言えば、このエッセイのなかには一見、法を無視したように見える行動をしても法律を守り、偏見のないロレンスがいるのだと感ずる。

主 要 文 献

- Horace : *The Odes and Epodes*. Translated by C. E. Bennett. Harvard University Press, 1988.
 Lawrence, D. H. *The Trespasser*. Cambridge : Cambridge University Press, 1981.
 ———. *The White Peacock*. Cambridge : Cambridge University Press, 1983.
 Nisbet, R. G. M. and Hubbard, Margaret : *A Commentary on Horace Odes, Book I*. Oxford : Clarendon Press, 2001.

- Pinto, Vivian de Sola and Roberts, Warren. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. Two volumes. London : Heinemann, 1964.
- Roberts, Warren. *A Bibliography of D. H. Lawrence*. London : Rupert Hart-davis, 1963 and Cambridge : Cambridge University Press, 1982 (the second edition).
- Worthen, John. *D. H. Lawrence : The Early Years : 1885 - 1912*. Cambridge : Cambridge University Press, 1991.